

11月28日 イザヤ書51章4～11節 今日の説教から  
説教題：「待望と切望と希望」

本日はアドヴェント第1の礼拝です。クリスマスのリースの中で、ろうそくを灯すためのリースを、特別に「アドヴェントクランツ」と呼びます。このクランツという言葉はドイツ語で「輪」を意味する言葉であり、私たちの主であるイエス様の王冠を意味しています。イエス様の誕生とは救い主の誕生であり、同時に「王の中の王」、私たち人間に対してどのような人物よりも優先するべき王の誕生を意味するのです。その王様の誕生の時を私たちは「待ち望む」、それが今日から始まるアドヴェントという期間です。

今日の聖書箇所の背景にある「バビロン捕囚」の時代において、イスラエルの民は救い主の到来を待ち望んでいました。アッシリアという強国にイスラエル王国が滅ぼされ、バビロニアという強大な国によって南ユダ王国の民が国を追わされて捕囚生活に入り、神様への信仰を守ることが出来ない時代が始まりました。特に、エルサレム神殿が破壊され、バビロニアの宗教を信じることを強いられて、神様への礼拝をすることが出来ない状態が続きました。だからこそイザヤ書の中には「インマヌエル（神は私たちとともにおられる）」という名前の救い主が与えられるという預言や、その救い主はエッサイの株の若枝、つまりダビデ王の子孫として生まれること、そして救い主が「苦難のしもべ」として現れることが預言されています。そのように、自分たちを王として導いてくれる人物はアッシリアやバビロニアの異邦人ではなく、ダビデ王の直系である生粋のユダヤ人であり、その人物が私たちの国を立て直してくれる、という希望を神様から受けていました。

今日の聖書箇所は、52～53章の「苦難のしもべ」の預言へと続いていきます。救い主が王様としてではなく、「見るべき面影はなく 輝かしい風格も、好ましい容姿もない」人物として与えられることをイザヤ書は預言しているのです。イスラエルの民を救い出す王は、絶対的な軍事的指導者として待ち望まれていました。しかし彼らに突き付けられるのは、そのような強大な存在ではなく、病に苦しみ、痛みに顔をゆがめる、等身大の人間として現れる救い主の姿なのです。神様への礼拝を忘れ、神殿を失い、国を追われることとなったイスラエルの民は、彼らだけではこの捕囚生活を抜け出すことは出来ませんでした。自分たちには何か罪があるからこのような苦難が襲い掛かってくるのかもしれない。しかし神殿を失った今、神様へその贖いの供え物を獻げることも出来ない。その葛藤の中で、彼らは「自分たちの罪をすべて贖ってくれる救い主」を求めたのです。

今日からアドヴェントが始まります。贖いの主であるイエス様が与えられたことは、私たちにとって大きな喜びです。私たちが神様に従い切れない罪と向き合うことが出来ること、罪深い私たちをも神様は救い出してくれること、そのすべてがイエス様によって教えられました。私たちと同じ目線で生きて、私たちの孤独も痛みも知って、それをいやしてくれる方が私たちの救い主である、その希望に満たされて、今週一週間を、クリスマスまでの日々と共に歩みましょう。

## 今日の説教箇所：イザヤ書51章4～11節

- 4:わたしの民よ、心してわたしに聞け。わたしの国よ、わたしに耳を向けよ。教えはわたしのもとから出る。わたしは瞬く間に／わたしの裁きをすべての人の光として輝かす。わたしの正義は近く、わたしの救いは現れ／わたしの腕は諸国の民を裁く。島々はわたしに望みをおき／わたしの腕を待ち望む。天に向かって目を上げ／下に広がる地を見渡せ。天が煙のように消え、地が衣のように朽ち／地に住む者もまた、ぶよのようない死に果てても／わたしの救いはとこしえに続き／わたしの恵みの業が絶えることはない。わたしに聞け／正しさを知り、わたしの教えを心におく民よ。人に嘲られることを恐れるな。ののしられてもおののくな。彼らはしみに食われる衣／虫に食い尽くされる羊毛にすぎない。わたしの恵みの業はとこしえに続き／わたしの救いは代々に永らえる。
- 9:奮い立て、奮い立て／力をまとえ、主の御腕よ。奮い立て、代々とこしえに／遠い昔の日々のように。ラハブを切り裂き、竜を貫いたのは／あなたではなかったか。海を、大いなる淵の水を、干上がりさせ／深い海の底に道を開いて／贖われた人々を通らせたのは／あなたではなかったか。主に贖われた人々は帰って来て／喜びの歌をうたいながらシオンに入る。頭にとこしえの喜びをいただき／喜びと楽しみを得／嘆きと悲しみは消え去る。